九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[010_1982]第十回中央図書館貴重文物展観目録 : 伊勢物語とその注釈書 : 名家自筆本・絵入り版本・後水尾院関係・近世注釈

九州大学附属図書館中央図書館

今井, 源衛
九州大学文学部 : 教授

田坂, 憲二
九州大学文学部 : 助手

https://doi.org/10.15017/1485006

出版情報：大学広報. 434, pp.1-12, 1982-02-24. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報 №434
昭和57年2月24日発行
（編集）
九州大学広報委員会

第10回中央図書館貴重文物展観目録

（中央図書館）

伊勢物語とその注釈書

―― 名家自筆本・絵入り板本・後水尾院関係・近世注釈 ――

教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、展示資料の選定、指導、解説、配列等について文学部今井源衛教授・同田坂憲二助手に多大の御尽力を頂きました。ここに厚く御礼申しあげます。

記

展示場所 ： 中央図書館メインロビー

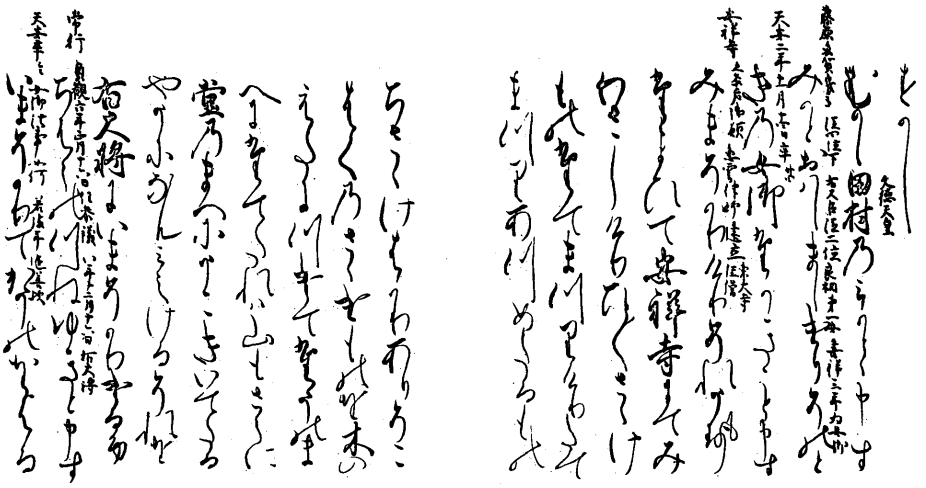
展観期間 ： 昭和57年3月2日（火）から
昭和57年3月20日（土）まで

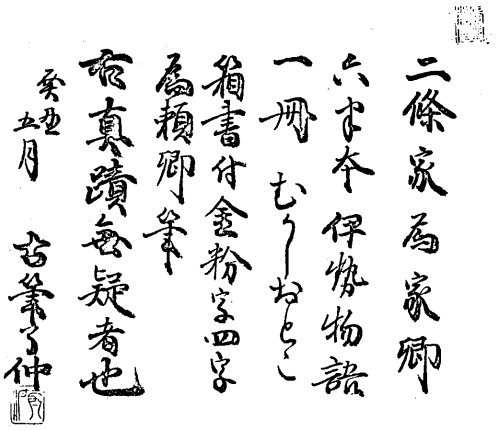
展観資料の解説

伊勢物語は、九世紀前半に成立した歌物語。在原業平の和歌を中心とする一二五の章段から成る。各段はそれぞれに愛情の美しさを簡潔に纏め上げた珠玉の小世界を形成しており、同時に全体としては、元服から終焉までの昔男の一代記の形となっている。古来より、「源氏物語」「古今和歌集」と共に、最も尊重され、最も広く享受されてきた文学作品で、写本・板本・注釈書の数も極めて多い。

本学には、細川文庫・支子（くちなし）文庫・音無（おとなし）文庫を中心として、伊勢物語関係の貴重な資料が多く蒐集されている。今回はそれらの中から、最重要資料たる、伝二条為家筆本・三条西実隆自筆本・細川幽斎自筆本等を取り上げ、他に、挿絵入り板本、後水尾院関係書、近世の代表的注釈書、という観点からそれぞれ数点を選んでみた。（猶、個々の記述に際し、音無文庫・支子文庫関係の蔵書印は、繁雑を避けるためあげなかった。）

一　伊勢物語　伝二条為家筆、根源本。





細川文庫本。桝形本（17.5×17.0 cm）列帖装、一帖。鎌倉中期写。表紙は鳥の子、金銀砂子をまき山水を描く。中央に打付書で「伊勢物語」と墨書、室町頃の字。本文料紙は鳥の子。墨付一二八丁。本文は一面九行、一行一三字前後。本文は根源本系統（定家本伊勢物語は、根源本・天福本・武田本の三系統に分けられる）で、行間に多量の勘物を有する、本文と同筆。巻末に根源本奥書・業平の略歴等を載せ、最後に近世初期頃とおぼしき字で「このさうしひとわたりたしかに見さふらひぬ」云々と記されている。

本書は、根源本（流布本）諸本中でも独自の本文・奥書、豊富な勘物を有しており、定家本成立の過程を示唆する貴重な資料である。書写年代の古さとも相俟って、根源本第一系統の最善本と認められている。早く古典文庫より複製本が刊行され、学会でも注目されている一本である。猶、本文筆者を二条為家（定家嫡男、二条家の祖。1198－1275）、箱書筆者を冷泉為頼（1592－1627）とする古筆了仲の極状、為家筆を証する了佐・了泉・了祐の添状がある。為家自筆の和歌懐紙などと比較すると異筆のようであるが、料紙・墨色・書風から見て、鎌倉中期は下らない頃の書写である。

二　伊勢物語　三条西実隆筆、天福本。

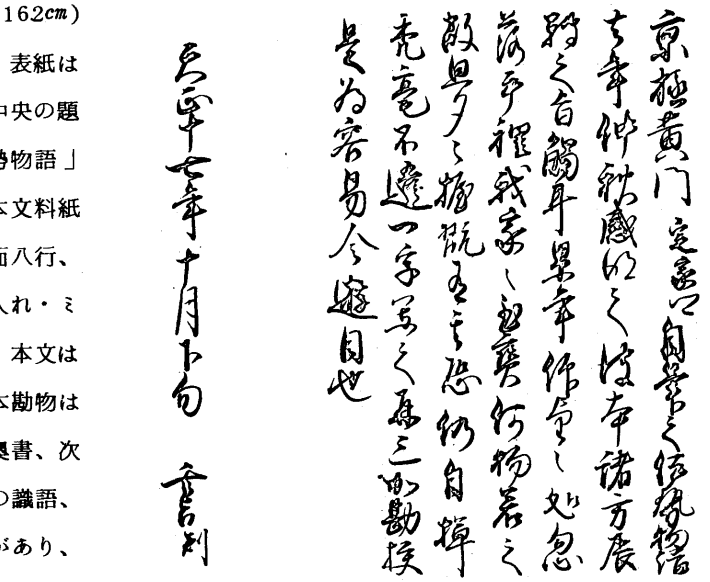
細川文庫本。中本（17.0×12.5 cm）列帖装、一帖。室町中期写。表紙は茶色地に草花文様金砂子散らし。朱色の題簽を中央に付し「伊勢物語」と墨書、本文と同筆。本文料紙は鳥の子。墨付八七丁、一面一〇行書、一行二〇字前後。行間に細字の注記（勘物・校異）がある、同筆。朱で声点を付す。本文・勘物・声点、何れも天福本系統のもの。奥書は天福本々来のもののみ。勘物は簡略なものを中心に行間に記され、天福本巻末勘物はこれを欠く。校異は天福本々来のものを墨書で、武田本との異同を朱で記す。筆者を三条西実隆とする畠山牛庵・古筆了意の極札が添えられている。筆跡から見ても明らかに実隆自筆本である。

三条西実隆（1455－1537）は、内大臣公保の男。正二位、内大臣。逍遙院、堯空と号した。東山時代の代表的学者・文人で、彼の学統は長く堂上の主流を占めた。伊勢物語の講釈・書写も精力的に行い、現存する写本も多い。実隆は蜷川親元から定家自筆の天福本を譲り受け、忠実な転写本を数部作製したが、本書もその一で、学習院大学本（古典大系底本）

河野記念館本などの兄弟本に当る。

三　伊勢物語　細川幽斎筆、武田本。

細川文庫本。大本（24.0×162cm）列帖装、一帖。室町末期写。表紙は縹色地に金泥で檜を描く。中央の題簽に肉太の豊かな字で「伊勢物語」と墨書（伝中院通勝筆）。本文料紙は鳥の子。墨付九四丁、一面八行、一行二〇字前後。若干の書入れ・ミセケチがある、本文と同筆。本文は武田本系統であるが、武田本勘物はこれを欠く。巻末に武田本奥書、次いで天正一七年の細川幽斎の識語、更に年月日を欠く仮名識語があり、幽斎の花押が記されている。識語・



本文の筆跡から、幽斎自筆本と見做すことができる。

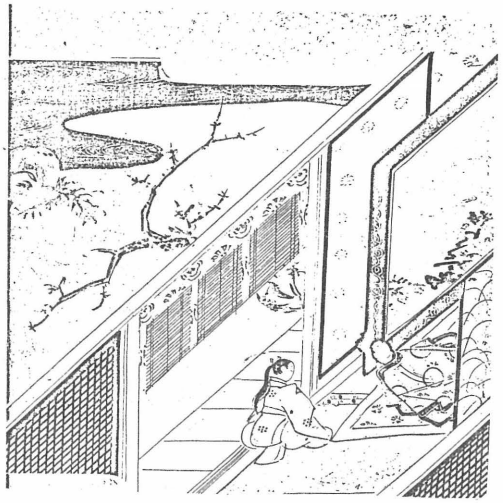
細川幽斎（1534－1610）は、本名藤孝。三条西実枝に学び、二条流の学問を継承した。その著「伊勢物語闕疑抄」は、中世勢語研究の集大成である。本書第一識語や「闕疑抄」の記述によれば、幽斎は天正一六年定家自筆武田本を入手、翌年「不違一字写之再三加勘校」したものが、本書の親本たる天正一七年幽斎書写本である。後、定家自筆本は徳川家の手に移ったため、同本から再度「その本をもてわこのためにかさねてこれをうつ」したのが本書である。第一識語に自身の花押を書かず「判」と記したのは、天正一七年本を証本として尊重し、その転写本であることを明示しようとしたものか。今日、定家自筆本・天正一七年本は存せず、本書は中院通勝書写本（天理図書館蔵）などと共に、定家自筆武田本再建の最有力資料である。

四　伊勢物語　嵯峨本覆刻整版。

大本（26.9×18.9㎝）袋綴（大和綴）二冊。整版。表紙は内曇り料紙、中央に「伊勢物語上（～下）」とある。本文字高23.7㎝。一面八行書。上巻墨付五一丁、下巻六四丁、色替りの料紙を用いる。挿絵あり、上巻二五面、下巻二四面。下巻々末に「慶長戊申仲夏上浣　也足叟」の嵯峨本第一種(イ)版の刊記を有するが、通勝（也足叟）自身の花押を欠き、文字自体も古活字のそれではなく、慶長一三年版嵯峨本の覆刻整版本である。蔵書印は各巻々頭・表紙に「岡本氏蔵」（況斎か、未詳）「水島家蔵」（未詳）「中川」「中川家蔵書印」（中川忠英）がある。

伊勢物語は嵯峨本各種の中でも特に好評裡に迎えられたもので、慶長一三～一五年の間に全四種九類の異版が刊行されている。更に本書のように、古活字の字体・挿絵をそのままに模した整版本も出版された。その刊行は嵯峨本の出版より、さほど遠くない頃と推定されている。嵯峨本伊勢物語が勢語享受史の上で果した最も重要な役割は挿絵を取り入れたことである。先駆的なものとして、中世の絵巻・奈良絵本は存在していたが、量産された嵯峨本によって始めて挿絵の形態が確立された。以降江戸時代の伊勢物語の板本は殆どが挿絵を取り入れ、しかもその図柄も嵯峨本のものを踏襲している。

五　伊勢物語　奈良絵本。



支子文庫本。大本（24.3×17.8㎝）列帖装、二帖。近世中期写。表紙は紺地に金砂子をまき、遠山雲霞海辺文様（上巻）秋草花文様（下巻）、見返しには金銀箔を用いるなど、典型的な嫁入本仕立て。表紙左肩の題簽に「いせ物語　上（～下）」と墨書。上巻墨付四九丁、下巻六三丁。一面一〇行書、段末は往々にして散らし書きにする。上・下巻各二四面の彩色の挿絵入り。下巻々末に「伊勢物語新刊　世酷多矣」云々の嵯峨本第三種本（慶長一四年刊）の奥書を有する。

本書は奥書を転写していることからも窺えるように、嵯峨本を基として作成された近世の奈良絵本である。挿絵の総数（但し落丁のため四段の絵を欠く）挿入箇所も嵯峨本に一致し、構図もほぼ等しいが、人物の配置を逆にしたり、背景の図柄を変えるなど、細かな点に工夫も見られる。中世の奈良絵本に比べ構図が固定化した恨みはあるが、配色もすばらしく、すこぶる美麗な本である。

六　伊勢物語　寛永十年版。

中本（16.0×11.3㎝）袋綴、二冊。整板。表紙は無地焦茶色斐紙、題簽はこれを欠く。上巻四二丁、下巻五四丁。四周単辺（13.0×9.9㎝）一面一一行。挿絵入り、全四一面。「寛文十年庚戌季春吉日　通油町本問屋」の刊記がある。

本書は、大本がその殆どを占める伊勢物語の絵入板本の中では、享保一四年鱗形屋（うろこがた）板などと共に、比較的珍しい中本である。挿絵は素材・構図共に嵯峨本のものに極めて近いが、二三段（前栽の中）、二七段（たらひの影）、四九段（若草）、六三段（つくも髪）、六八段（住吉の浜）、八〇段（おとろへたる家）、八二段（渚の院）、八七段（あまの漁火）の各図を省いている。

七　首書（かしらがき）新抄伊勢物語　貞享二年版。

音無文庫本。大本（23.0×16.4㎝）袋綴、一冊。整版。藍色無地の表紙中央に、双辺の刷題簽で「首書新抄伊勢物語　絵入読曲全」とある。「全」の字は、もと「上」とあったのを上からなぞり書きしたもので、綴じた背の部分には三段の凸凹があり、もと三冊本を一冊に合綴したもの。全五九丁。四周単辺（20.2×13.9㎝）、上段に細字で注釈（一面二四行）下段に本文（同一二行）及び挿絵（全二八面）。「干時貞享貳乙丑年仲秋吉辰　繪師京吉田定吉　江戸川瀬石町大文字屋半兵衛・京御幸町亀屋町西村七郎兵衛開板」の刊記がある。

伊勢物語の絵入板本に簡略な注を附して読み易くし、読者層の拡大を狙ったのが、この首書本である。好評を博したらしく、延宝二年版（頭書伊勢物語抄）延宝七年版（新版伊勢物語抄）貞享二年版（本書、別に井筒屋忠左衛門他板もある）元禄三年版（伝受入首書伊勢物語、九大に一本蔵）など多数の版が存する。

八　伊勢物語絵抄　元禄三年版。

音無文庫本。大本（26.9×16.8㎝）袋綴、三冊。整版。幹色の表紙、中央に双辺の刷題簽に「新注絵抄伊勢物語　上（〜下）」とある。上巻二〇丁、中巻二六丁、下巻一六丁。四周単辺

（22.8×16.2㎝）。上巻一・二丁に、伊勢物語作者の説、岩本の社・伊勢寺の図、業平・伊勢の略伝を載せる。三丁以下、下段に伊勢物語本文（一面一二行）、上段右半分に細字で頭注、左半分に挿絵（全九九面）を掲げる。「元禄六年癸酉孟春吉日　江戸芝神明前井筒屋忠左衛門　大坂真斎橋筋秋田屋市兵衛　京押小路橋町大文字屋七郎兵衛」の刊記がある。

形式的には前記の首書本とほぼ同様の体裁を取っているが、挿絵を上段に回し、その数を約四倍にし、絵の内容を説明する本文を付すなど、一段と啓蒙的になっている。挿絵が占める分だけ頭注の量が少なくなっているが、その替りに傍注の形で行間に記され、これを補っている。

九　伊勢物語御抄（みしょう）　後水尾院著。

音無文庫本。大本（27.3×19.6㎝）袋綴、一冊。近世中期写。表紙は渋引き、左肩の題簽に「伊勢物語御抄」と墨書。内題は「伊勢物語抄」本文料紙は楮紙。墨付五〇丁、一面一二行書。奥書の類はない。蔵書印は「妙瑞之印」「俊鳳」（共に浄土宗西山派の僧俊鳳の印）。

本書は後水尾院の勢語注釈書。近世初期は宮中において伊勢物語研究が最も盛んであった時期で後陽成・後水尾・後西・霊元の代々の帝も、それぞれ注釈書を著したり、廷臣を集めて講釈を行った。中でも一〇八代後水尾院（1596－1680）は、伊勢・源氏などの古典研究に意を致し、伊勢物語に関しては「伊勢物語御抄」を著したほか、明暦元年・二年・万治三年・寛文四年・寛文一二、三年の五度に亘って講釈を行っている。後水尾院の研究は、質量共に近世初期における勢語研究の一つの頂点であり、「御抄」や講釈の聞書も盛んに転写され、広く流布した。

一〇　伊勢物語抄　後水尾院流。

音無文庫本。大本（26.5×18.2㎝）袋綴、一冊。近世中期写。表紙は泥入りの間合紙。黄色地に雲形草花文様の鳥の子の題簽を中央に付し「伊勢物語抄」と墨書、本文と同筆。本文料紙は鳥の子の勝った交ぜ漉き。墨付一七二丁。一面一〇行書。朱・墨の書入れが多いが、本文と同筆。巻末に「元禄四辛未秋八月　写之畢　元繁」の識語がある。書写年代もほぼその頃であり、書写者自身の識語か。

大津有一氏（『伊勢物語古註釈の研究』）の調査によって、本書も又後水尾院の注釈書であることが明らかにされた。但し、本書中に屢々引用される「朶」「明」「星耳」等が先行の如何なる注釈・講釈を受けるものかなど、詳細は不明。前掲の「伊勢物語御抄」に比べ、注釈の量は格段に多く、後水尾院の勢語研究を探る上では不可欠の資料である。

一一　伊勢物語聞書　明暦二年講釈。

音無文庫本。大本（26.8×19.7cm）袋綴、五冊。近世中期写。表紙は無地の縹色斐紙、左肩の題簽に「後水尾院御講釈 伊勢物語抄 秘注 一（～五）」とある。内題は「後水尾院帝　御講釈聞書」。本文料紙は楮紙。墨付、各巻平均三〇丁。一面一二行書。五巻々末に「元文二年三月廿日写功早　伴部八重垣翁 七十一歳」との奥書がある。八重垣翁の自筆本か。伴部八重垣翁（1667－1740）は本名安崇。神道家。著書に「神道初伝口授」など。元文五年死去。

本書は、明暦二年の後水尾御講釈の際の、岩倉具起の聞書である。巻頭の記述から、講釈が八月二二日から九月二九日にかけて一二度に分けて行われたこと、聴衆は妙法院堯然法親王以下八名であることなどが分る。同年の講釈では、道晃法親王・飛鳥井雅章・岩倉具起の三人が聞書を作成したが、道晃親王聞書は現存しない。具起（1601－1660）は久我庶流、木工頭岩倉具堯の男。後水尾院文学サロンの一員。従二位、権大納言。

一二　伊勢物語聞書　明暦二年講釈。

音無文庫本。大本（27.2×19.6cm）袋綴、一冊。近世中期写。表紙は渋引き、左肩に題簽を付すが、文字は判読不能。内題に「伊勢物語聞書」とある。本文料紙は楮紙。墨付一七八丁、一面一二行書。奥書・識語の類はない。前掲の「伊勢物語御抄」と表紙の体裁・本文の筆跡が一致することから、同一人物の手によって書写されたものと思われる。

本書は、明暦二年後水尾院御講釈の、飛鳥井雅章による聞書であるが、前出の岩倉具起の聞書とは、記述の体裁・内容共にかなり異っている。講釈聞書は、筆録者の資質によって差異がでるのは当然であるから、明暦二年の御講釈も、この雅章・具起両者の聞書を総合してこそ、その全体像がより明確になる。雅章（1611－1679）は、権大納言飛鳥井雅庸の男。従一位、権大納言。歌人として名高く、後水尾院文学サロンの中心的人物で、古今伝授を院から受けている。著書に「知題抄」「序文抄」、弟子に河瀬管雄・清水宗川がいる。

一三　伊勢物語能愛抄　後水尾院流。

文学部蔵。大本（27.6×19.2cm）袋綴、一冊。近世中期写。表紙は薄い肌色地に渋引き、左肩の題簽に「伊勢物語 能愛抄」と墨書、何れも後補。本文料紙は楮紙、全体に亘って裏打ちあり。墨付一四七丁。一面に伊勢物語の本文を五行に分けて書き、行間・頭部余白に細字で注釈を記す。巻末に　元禄九年の中原直方、同一五年の仲原直秀の、二種の識語がある。蔵書印は「紅梅文庫」（前田善子）「月明荘」（反町茂雄）。

本書は、その奥書から明らかなように、後水尾院→盛胤法親王→能愛法師へと継承された

後水尾院流の注釈書である。盛胤法親王（1651－1685）は、後水尾院の男、三〇余歳の若さで世を去ったが、多数の遺著があり、卓越した文才の持ち主であった。猶、親王旧蔵の「伊勢物語集註」が本学図書館に蔵されている。能愛法師は生没未詳、北野天満宮の宮仕、所謂北野の連歌師。宮仕たちが北野の学堂で源語や勢語を講じたことは諸記録に見えるが、能愛もそのような一人であった。本書は、堂上の学統が北野の連歌師へ、更に地方（江戸）へと広まっていったことを示す好資料である。本書は孤本で、一時その所在が不明で「国書総目録」には「読書と文献」（古書目録）に依って書名があげられたが、現在文学部の所蔵に帰している。

一四　伊勢物語集註　一華堂切臨著。

音無文庫本。大本（27.4×18.5cm）袋綴、一二冊。整版。表紙は藍色地に牡丹唐草雷文繋ぎの押形文様、左肩の刷題簽に「伊勢物語集註　一（～十二）」とある。本文字高23.0cm。一一行。一～一一冊は勢語各段の注釈。第一二冊に流布本・武田本奥書の解釈、物語の大意、雑説などを記す。各冊平均四〇枚。首巻尾巻に著書切臨自身の慶安元年の序跋がある。巻末に承応二年の刊記がある。蔵書印は「円融蔵」「盛胤之印」（巻頭）「加持井御文庫」（巻中）がある。何れも梶井門跡盛胤法親王（前述「能愛抄」の項参照）のもの。

一華堂切臨（1591頃～1670頃）は、一華堂乗阿の弟子。著書に「源氏綱目」「大和物語首書」がある。本書は、その自序から明らかなように、三条西実澄→乗阿→切臨へと継承された学説を中心として、多数の先行諸注釈書を吸収して、諸注集成を試みたもの。「伊勢物語抒海」「伊勢物語秘訣抄」などの諸注集成の先駆となった。承応二年版の他に慶安五年版がある。

一五　伊勢物語抒海（じょかい）　浅井了意著。

音無文庫本。大本（26.9×19.4cm）袋綴、一〇冊。整版。表紙は藍色地に牡丹唐草雷文繋ぎの押形文様。左肩の双辺の刷題簽に「伊勢物語抒海　一（～十）」とある。四周単辺（21.3×17.5cm）本文一面九行。第一冊に、題号考、主要人物の略歴等を記し、二冊以下が注釈。記述の方法は、各段毎に先ず大意を述べ、次いで下半分に伊勢物語本文を適切な長さに切って示し、上部に細字（一面一六行平均）で注釈を記す。注記の内容は概ね「集註」のそれを踏襲している。又、段中・段末に挿絵を入れる（全四八面）。第一〇冊巻末に、承応四年の了意の自跋がある。現存諸本全て刊記なく、刊年不明。

浅井了意（？－1690）は、別号松雲。内外典に通じ、多くの仏書・仮名草子を著した。

本書は注釈の内容には新味は見られないが、嵯峨本以来の挿絵を注釈書としては初めて取り入れたり、各段の大意を冒頭に示すなど、注釈書の平易化・通俗化を試みている。

一六　勢語臆断（せいごおくだん）　契沖著。

音無文庫本。大本（26.3×18.3cm）袋綴、二冊（もと五冊を改装・合綴したもの）。表紙は縹色斐紙、左肩の題簽に「勢語臆断　一（～二）」と墨書、後補。四周単辺（19.4×14.7cm）各巻平均四〇丁強。首巻々頭に伴蒿蹊・田山敬義の序、五巻々末に享和三年の刊記を有する。蔵書印は「東秋田家文庫」「若山氏蔵書記」（未詳）がある。

作者契沖（1640－1701）は下川氏。真言宗僧侶、歌人、国学者。著書に「万葉代匠記」「和字正濫抄」、門人に今井似閑などがある。「勢語臆断」は、契沖の学風そのままに、厳密な語義の吟味・史実の考証が特徴で、本書を以て伊勢物語研究は新註の時代に入る。「臆断」の伝本は写本の形で伝えられたものも多く、本学にも二部を蔵す。板本は、享和二年・同三年・嘉永二年の各版があり、このうち享和三年版が最も流布している。

一七　伊勢物語童子問（どうじもん）　荷田春満著。

音無文庫本。大本（23.7×17.0cm）袋綴、一三冊。近世後期写。表紙は縹色無地の斐紙、内・外題ともに欠く。本文料紙は楮紙。巻末に「荷田宿彌春満答」とある。奥書・識語の類はない。

本書は童子の問と、それに対する答の問答体の形式を取って伊勢物語の注釈を試みたもの。春満には、他に同形式の「万葉集童子問」がある。猶、勢語に関しては、最古の注釈書の一である「和歌知顕集」（鎌倉時代成立）も問答体を取っている。春満（1669－1736）は、神道家・国学者。著書に「万葉集僻案抄」、門弟に賀茂真淵がいる。「童蒙抄」は「臆断」「古意」と異って板行されることなく、写本の形で伝わるのみである。

一八　伊勢物語古意　賀茂真淵著。

音無文庫本。大本（25.8×18.1cm）袋綴、七冊（一冊は「よしやあしや」）。整版。表紙は縹色斐紙、中央の刷題簽に「伊勢物語古意　一（～六）」「よしやあしや」（第七冊）とある。各巻平均三〇丁。本文字高24.1cm。第七冊巻末に、「寛政五年癸丑秋九月」以下の刊記がある。

賀茂真淵（1697－1769）は、国学者・歌人。荷田春満に学び、田安宗武に仕えた。著書に「冠辞考」「源氏物語新釈」、門人に本居宣長がいる。本書は「勢語臆断」「童子問」

両書の説を基本として、更に独自の説を加える。取り分け真名本の重要性を強く主張した。真淵の生存中は板行されなかったが、門人達によって転写され、寛政五年上田秋成によって校訂されたものが、秋成自身の「よしやあしや」を附して上梓された。「古意」を板行する秋成の抱負は、冒頭の序文に窺うことができる。